

令和元年度秋田県産業教育審議会議事録（要旨）

1 日 時 令和元年11月15日（金）13：20～16：00

2 開催場所 金足農業高等学校

3 出席者 委員12名

三栗谷俊明	（国際教養大学 参事（兼）キャリア開発センター長）
山村 明弘	（秋田大学大学院理工学研究科 研究科長 教授）
神田 啓臣	（秋田県立大学生物資源科学部アグリビジネス初学科 准教授）
渡部 羊三	（株式会社渡敬 副社長）
黒川 匡子	（株式会社ゼロニウム 取締役）
佐藤 伸	（三栄機械器具株式会社 代表取締役社長）
佐々木信行	（矢島木材乾燥株式会社 総務部長）
奥 真由美	（株式会社オクシュープラス 取締役）
齋藤 正和	（秋田県農林水産部農林政策課 課長）
石郷岡仁司	（秋田県中学校長会 会長）
小林 吉則	（秋田県高等学校教育研究会農業部会 会長）
黒澤 光弘	（秋田県高等学校教育研究会工業部会 会長）

4 日 程

(1) 開会行事

- ・教育委員会 挨拶
- ・参加者紹介

(2) 授業参観

(3) 生徒発表「秋田を彩る伝統文化、受け継ぐ愛のかたち、花ふきんの想いに魅せられて
～花ふきんの継承を目的とした学科横断的研究の最前線～」
造園緑地科3年・生活科学科3年 花ふきん継承プロジェクトチーム

(4) 審 議

【テーマ】高等学校における産業教育の改善・充実策について

～学び続ける力の育成に向けた地域との連携・協働の在り方～

5 審議概要（要旨）

議長

今回のテーマは、「高等学校における産業教育の改善、充実策について～学び続ける力の育成に向けた地域との連携協働の在り方～」であり、これから最初にワークを行い、提言をまとめたい。

一昨年に審議したテーマは、「地域産業の発展に寄与する人材の育成の在り方」であった。昨年は、「これからの産業社会に求める資質能力を育成するための産業教育の在り方」であり、一昨年前よりも未来型志向の話になった。また、「学び直し」を一つのキーワードとしてまとめ、提言した。

その「学び直し」という中には、それぞれの立場において、連携をとりながら、秋田県が全国でモデルケースとなるようなスタンスで、アフター5などにおいて、いろいろな業界、それから中学校、高校、大学の垣根を越えて何か取組をしていきたいと思いますというところで審議が終わった。このことを踏まえ、今年度は「学び直し」というよりも、「新しいことを学び続ける」ということが一つのキーワードであると思うので、そのような視点でこれから各班で協議をお願いします。各班での審議内容について、お話いただきたい。

(2班に分かれての協議)

A班A委員

現状と課題の意見として、1点目は、専門高校生は非常に多くの活動をしているが、世間の人たちにその取組が広く知られていない。小学校や中学校の先生方が専門高校の活動について情報をもっていない。そうすると、小学生や中学生はなかなか専門高校に対して意識が向かない。

2点目として、小学生や中学生を対象に職場体験を行っても、特定の職業に人気が偏ってしまう。そもそも職業について知らない。小学生や中学生もそうだが、保護者も地元でどのような企業があるか情報がない。

3点目は高校生の問題として、特に進学校では地域とのつながりが弱い。地域に対する情報が少なく、進学校の生徒が地域の企業に就職しても離職につながる傾向がある。

4点目として、高校生は大手に就職し、地元企業に残る人が少ない。

5点目として、本日の授業参観したときにも今では使っていないような古い炊飯器を使っている。生徒が卒業して実社会で有効に使えるような教材を揃える必要があるのではないかな。

最後は大学のことになるが、大学は学生が専門家になっていて、企業とのミスマッチが起きやすくなっている。分野横断的な人材を育成する必要がある。就職したら専門知識が役に立たない場合もあるので、自分で考えることのできる人材を育成する必要があるといった意見があった。

取組については、小学校や中学校に対して地元の企業の情報を発信する。あるいは、小学校や中学校に対して専門高校の情報を発信する。先ほど生徒の発表があったが、ああいったことを小学校や中学校で聞く機会がない。

産業教育フェアや、課題研究発表会に中学生が参加できる機会があれば効果的ではないかという意見があった。

進学校は受験勉強が中心なので、地域の情報に接する機会が少ない。進学校においても、地域の情報に接する機会を設けた方がいいのではないか。

地元の企業を利用するインターンシップは、地元の企業の就職に対して関心をもたせる効果がある。先生方も大変なので、地元の企業の方に臨時講師として来てもらうといったことも課題解決の一つの方法ではないかという意見があった。

B班B委員

学び続けるということをし仕事に向かう熱量という捉え方ではなく、仕事に向かうために学ぶということではない、他への興味付けを学び続ける力として定義付け皆で話をした。県庁も、高校の現場も、生徒のことや行政の手法についてではなく、職場として、学校の教員や県庁の職員として、一事業所として、どうその職について学んでいくのか。学び続けるということは興味につながるが、それをやることによって、世の中で何の役に立つかということ社員がどう捉えるか。そのためには外からの評価が必要であり、外からの評価というのはいかにして社会と連動している場をつくるか。

一方、社会との連動の場合をつくると秋田県の場合、あの会社の方が給料が高いという話に陥ってしまって、逆に経営者でバリアをしてしまう。これはもろ刃の部分ではあるが、今の秋田県の現状を考えると、連動という交流を広げる方向に行かないとだめになるというような危機感を経営の人たちはもっているという共通認識を得た。これは随分秋田県も進んだなという印象を私としてはもった。

その次に、どうしてもビジネスのやり方が何か問題はないですかというところから入るので、今ある課題を解決することのために考えるというサイクルになっている。それでは前に進んでいかない。学び続ける力のためには、課題を創出することが本来大事であって、課題を見つけるというのでしょうか。そこに主体的に自分から学んでいくというのが出てくる。特にAIをはじめとした技術の進歩の速さがあるので、ある領域をチャレンジしていく意味では、創出という部分を前提に考えていかなければいけない。私の中で大事なポイントであると思ったのは、新しいことを学ぶことが目的になってはだめだというのがあった。成果を求めてしまうが、そうではなく、取り組むことよってのプロセス中で失敗することもしっかりと管理職ないし、経営者が評価をしていく姿勢をつくっていかないと新しいことにはチャレンジしていかない。そのような雰囲気づくりをしていくことが学び続けるということの部分の認識としては必要である。ただ、現状と課題の中では、経営者側が社員に気を使ったりする雰囲気があったり、

職場で働く上での働き改革であるとか、なかなかこれを進めるには障害があるのではないか。

具体的な課題解決の取組については、例えば、フリーアドレスを導入している、双方向のコミュニケーションをとる会議の形式をとっている、今までのように順番に発言しなさいということではなく県庁がそれを行っているというのは、私の中では非常に革新的だと思った。上から言うとしても発言しづらい。若い人たちの行政職、研究職、分野を越えての若手の会というのをやり始めているという話もありました。そういう中で一つキーワードになるのは、官民のコラボレーションということと、異業種の交流である。

異業種の交流では、例えば男鹿海洋高校のサバ缶と大曲農業高校の味噌のコラボレーションが現場から出てきたが、お金がなく先に進まないという声があった。要は、解決に向けた取組に予算を付けるということを行政にはお願いしたい。秋田県はどうしても異業種横並びになって何かを進めていくということが苦手だが、いろいろな農家も、JAも、オール秋田ということをやろうとしているという解決策があった。

一つの提案として、合同入社をやっているが、その後の研修の場がないということで、できれば独身寮を合同でつくるなどにより、そこで異業種または地域を越えて交流の場をもてる、そういう場づくりに予算をつけてもらおう。もう一つは告知に関して、いろいろとよい取組を行っているが、なかなか情報が異業種、他業種に伝わらない。終わった後でテレビに放映されるといったことがある。行きたかった人がそのようなこともあったんだということが多いとの意見が出た。同じように、インターンシップの内容について、インターンシップはやはり就業の場として高校生にとっては大事な部分である。企業側にただこの生徒が行きますということではなく、そこに具体的なインターンシップの内容についてのやりとりを、企業側と学校側でプロジェクト型というほどではなくとも、何か双方向でやり取りをするような機会を与えていただけないでしょうかということが最後のまとめとして出てきた。

C委員 異なる企業でアパートをつくるという提案があった。実際難しいものなのか。そういった異業種の共同の秋田県の現状はどうなっているか。

D委員 できていないと思う。面白い企画であると思う。

E委員 企業任せである。

C委員 同業種ではそのように考えたりするのか。全然、何もないということか。

- D委員 各々の会社の福利厚生が違うので難しい部分もあるとは思いますが、企画としては面白い。
- E委員 それで、県北、県の中央部、県南とあればなおよい。
- 議長 秋田駅前には大学生が入ることのできる施設をつくっている。社会人版があればということで話をした。テレビで建設業の女子会という取組をやっていた。いろいろな企業でそのようなことが少しずつある気がする。
- C委員 そのような取組ができるといいとは確かに感じた。大学生でも、同じことを考えたことはある。なかなかそうはならないが。企業は福利厚生など細かい部分で難しいこともあると思う。何か提携できるといい。
- E委員 きちんと家賃を払って、企業は住宅手当も払って、ここでは異業種の人とも会えるということであれば、運営コスト自体は賄える。あとは建設のコストも含めて考えることになる。先進事業が県か何かであれば、助成金とか。
- 議長 そうですね。市営住宅や町営住宅とか、もし空きがあるのであれば、その活用を考えると、いろいろな方法があるような気がする。
- 事務局 本日は、班に分かれて提言をまとめていただいた。非常に示唆に富んだ御指摘をいただいた。まず一つ、「情報が少ない」ということがキーワードになっていた。「情報が少ない」ことについては、校種間、小学校・中学校・大学の間、業種間、地域間、企業と学校、あるいは家庭も含まれるかもしれない。そういった見えない情報の壁のようなものがあるのかもしれない。そのあたりをいかに取り払っていくのか。情報を得ようと思えば得られる時代に、いかに情報を有効に発信し、受信していくのが今後の課題であると感じた。
- 少ないものにもう一つ予算というものがあつた。苦しいところではあるが、知事部局と連携しながら考えさせていただく。
- もう一つ大変示唆に富んだ御指摘は、課題を創出する力について。目に見える課題はよく気が付くし、その課題を解決しようと頑張るものではあるが、目に見えない課題に本質が潜んでいるかもしれないということも考えた。そのあたり、やはり目に見えないものを見ていくためには考えることが大切であるということ。おそらく、何のために自分がここにいるのか、何のためにこのことをやっているのかといった意味を考えること、これが見えないことを見ていく力であると感じた。

本日の生徒の発表は、地域で受け継がれたものを伝承していくという非常に意義のある内容であった。そこにもやはり伝承する内容というものは、決して変わらないというのではなく、受け継ぐ人がそれぞれの考えの中で深め高めているものであり、時代を超えて深めながら伝承していくということに非常に意味がある。そこにはよりよいものをつくりあげていくという、ものづくりにかける思いが変わらないものとして受け継がれていく。

そのような中で、本日の協議の冒頭で議長から審議会における審議の継続性あるいは系統性、積み重ねといった趣旨の発言があった。本日の審議を事務局で来年度の審議に繋がるようにテーマを設定していく。